

Title	経済時事評論
Sub Title	
Author	安川, 貞三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1918
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.12, No.5 (1918. 5) ,p.691(153)- 696(158)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19180500-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ある。蓋し一經濟を完全に理解せんとすれば其經營如何を知悉するの要がある、即經營は經濟の目的意志 (Zweckwille) の表現、若しくは到目的手段なるが故である。此處に云ふ經濟 (Wirtschaft) とは、メンデルトの所謂 „Verwertungs-Gemeinschaft“ (活用團體) の意にして、經營とは又等しく彼れの所謂 „Arbeitsgemeinschaft“ (労働團體) の意である (註九) 故に、此意味に於ける、經濟の精神 (Der Geist der Wirtschaft) は常に必ず、經營の上に表現せられ、反映せらるゝものである、従つて、商工業に於いても、農業に於けると等しく、其經營形態の推移は其經濟の變遷を物語るものである、商業の一部門なる銀行に於いても亦其經營形態の推移よりして銀行經濟の本質を攻究することを得るのである。蓋し經營の上に經濟の精神、及私經濟的成果 (Erfolge) — 利潤の本體を認むるを得るからで

ある。而して、經濟的經營關係の解剖は分れて總收入の問題、總支出の問題、私經濟的利潤の問題、預金の安全確實の問題及準備金問題、従つて投資の種類の問題と成るのである。此中總支出及私經濟的利潤の問題は他日の研究に譲りて茲に論じない。蓋し、總收入の問題の研究は獨逸銀行の發達の方向、及業務の方針を闡明にすべく、預金の安全確實及準備金の問題は『獨逸銀行制度調査委員會』の決議と密接の交渉を有するからである。以下各節にて論せんと思ふのである。

(註一) 米國の National Monetary Commission 編纂の „German Bank Inquiry of 1908-9. 參照。
 (註二) 研究資料として提出せられたる、統計及理論は皆集して „Materialien zur Frage des Depositenwesens“ なる書名の下に上梓せられた。其内容を爲すものにして擧ぐるに足るものは次の如し。
 ハステノーの「預金銀行整齊に関する諸問題」フランスブルヒの「獨逸投機銀行統計」オプストの「獨逸預金銀行の立

經濟時事評論

安 川 貞 三

物價、米價調節の訓令

一般物價の暴騰に伴ひ、近時食料品、就中米價の奔騰は一見其已む處を知らざるの觀がある。曩に暴利取締令、輸出制限等によりて之が調節を試みたる當局は、最近又もや外米の再輸出を禁止し或は物價時に米價調節の訓令を發して此が調節に努力し今や更に定期取引の一部禁止をすら斷行するに至つた。誠に當局が日常必需品の價格調節に對し焦心苦慮するの狀正に眼前に見るの思がするのである。

然れとも彼の『賣惜しみをなすは堅實なる生産者の最も慎しむ可き處』などと云へる『』

法規定論』及帝國統計局の「預金銀行干渉論」其他「發行業務に関する統計」「貸借對照表論」等あり。此等の中には、リーサーの所謂 noch seltenen branchbare Reformvorschlage” 存するは明かなる事實であつた。

(註三) Georg Schanz-Artikel „Banken“ im worterbuch der Volkswirtschaft von Elster Bd. I. S. 310. 參照。
 (註四) 前掲「調査會議事録」七六二頁參照。
 (註五) 同書、四四頁參照。
 (註六) Kreditbanken は株式銀行 (Effekten Bank.) 投機銀行 (Spekulationsbank) 及發行銀行 (Emissions bank) を包括せん。
 (註七) Casor Straus の「單一預金銀行制度論」或又 Otto Warschauer の「國立預金銀行論」或又 Graf Armin の「立法的干渉論」等を云ふ。
 (註八) Miscellaneous Articles on German Banking p. 20. 參照。
 (註九) Sombart, Dir. Moderne Kapitalismus s. 5-6. 參照。

爲どかし』の訓令、論議が今日の資本主義的精神に満てる生産者に對し果して幾何の効果があるか。實に彼等の利益を最もよく知悉するは彼等自身であつて、何んぞ世情に疎く、經濟の理に暗き當局の指示を待たう。吾人は自己の一言一行が直ちに國民の思想行動を支配し得ると信する舊式官僚家の迂愚を憫まざるを得ないものである。況んや國民の生計の逼迫に因る物價調節の必要を高唱しながら管内一般の人民に浪費の慎しむ可き諭達を地方長官に訓示するが如き殆んど訓令の體を成さざるものと云はなければならぬ。

定期取引の制限

更に農商務大臣は四月十七日全國米穀取引所に對し當限中限の取引の停止を命じた。勿論米價騰貴抑制の目的を以てなされたものであつて定期取引が米價の騰貴を不當に促進すると信じ

た結果に外ならぬ。而て既に當中兩限の取引を停止した以上は轉賣買戻を本質とする本來の定期取引は、よし先限取引の依然として許さるゝとしても極度に迄制限せられたものと云はなければならぬ。然り政府の信ずる如く定期取引が正米の價格に影響を及ぼすことは争ふ可からざる事實であるけれども、而も定期取引の利益の存するものも亦此點より來るものに外ならない。則ち定期取引に於ける買方なるものは將來に於ける米價の騰貴を豫想するより來るものであつて其結果正米に影響を及ぼして價格の騰貴を促がし、而して價格の騰貴は消費の節約となりて更に騰貴せんとする傾向を抑止するに至るものである。果して然らば定期取引なるものは將來の需要供給を最も敏活に考慮し最も迅速に現在の代價の上に反響せしむるが故に却つて代價を平均せしめ、其暴騰暴落を抑止するの效果ある

ものと云はざるを得ないのである。而して實際上の需要供給を基礎とせざる投機は其成功を期待する能はざるが故に定期取引に於ける需要供給は實際上の需要供給の基礎の上に立ち此と一致するを以て原則となすのである。然り而して今日の定期取引による米價の騰貴は眞に供給の不足に歸因するものであるならば今日に於て定期取引を停止して米價の騰貴を抑止せんとするが如きは是れ却つて現在の消費を促かして將來に於ける米價の暴騰を助長するものと云はざるを得ないのである。果して然らば今後端境期に於て若し米價の極度に暴騰することあらんか是れ正しく農商務大臣の責に歸す可きものと斷じなければならぬ。仲小路農相果して此の覺悟ありや。吾人は氏の米價調節策の却つて藪をつゝいて蛇を出すの類にあらざるなきやを恐るゝものである。

關稅の撤廢

思ふに眞の米價の調節は現代の經濟秩序の認めらるゝ限りは需要、供給の方面に於て是が手段を求めなければならぬ。然らざる限り假令二十の調節策の連發も決して其所期の效果を達する能はざるのみならず、却つて圓滑なる經濟の發達を阻害し、人爲的に一部の人の損失に於て一部の人を利する不公正を敢てするに至るものである。

此點から米價調節策として今日我國の實際に於て實行し得可きものとして而も其効果の最も顯著なるものを擧げんか、外國米の輸入を外にして之を求む可からざるものである。而して此が爲めに關稅を撤廢し、船腹の調達を計ることは何よりも先づ採る方策であらねばならぬのである。然かり政府が去る第四十議會に於て此關稅の一時的廢止を仄かしたるを見れば政府亦

其必要を認められたものであらう。然るに其の後に到り政府は關稅の撤廢が農民に不良の影響を與ふるものと稱して其實行に反對したるが如きも殆んど吾人の解し能はざる所である。抑々當局が諸種の調節策に苦心慘膽到らざるなきは何の故ぞ。皆是れ米價の低落を計らんがために非ざるか。果して然らば一方に暴利取締令、輸出禁止、取引の停止によりて百方米價の低廉を計りつゝ、他方に於て其低落を理由として關稅の撤廢に反對するが如き吾人は其意を知るに苦しむ者である。前者による米價の低落が農家に悪影響を與へずして、獨り關稅の撤廢による低落が農民に不良の影響を與ふると云ふ理由那邊にあるか。吾人は當局者に果して米價調節の誠意あるや如何を問はざるを得ないものである。

政府の外米買付

産地の價格を騰貴せしむるは勿論であるけれども、而も關稅丈騰貴するが如きことある可き筈のものでない。蓋し外國生産者は今日の代價にすら其買付に應じてゐるのであつて、是れ以上の利益あらば好んで其賣却に努む可く、而かも多數の生産者が互に競争する以上は關稅額の全部が彼等の利益となることは想像するを得ない所である。然らばそれ丈我國内の米價を低落せしむる効果ありと云はねばならぬ。況んやかかる多少の原産地に於ける價格の騰貴は政府の外米買付に於ても亦之を免かるゝ能はざるものであつて殊に吾人が前號に説述したる如く政府は本來海外活動に不適當なるものであるからして政府が公然と一時に多額の量を買入れんとせば却つて關稅の撤廢以上に原産地の價格を高むるやも未だ知る可からざるものがある。果して然らば原産地の價格騰貴を理由として關稅の撤廢

然るに最近に於て政府は關稅の撤廢に對する如上の理由を棄てて、更に此と相容れざる考慮より來たる理由を述べてゐる。則ち曰く、關稅の撤廢は原産地に於ける價格を騰貴せしむるのみで調節の効果がなにと。先きに政府が農家に悪影響を與ふると云へるは是れ關稅の撤廢が米價を低落せしむることを前提とするものであるにも拘はらず、茲では此により米價の低落を期する能はずと説くが如き如何にも政府に確固たる經濟上の識見なきを表白せるものと云はざるを得ないのである。斯くして今や政府は關稅の撤廢に代ふるに外米の買付を目論見つゝあるやに傳へらる。然らば關稅の撤廢は米價の低落を期する能はざるかと云ふに決して然らず、勿論關稅の低落丈今日の外米相場が低落することは期待出來ない。殊に米の如く我國民生活の必需品にして彈力性の少なき貨物の關稅の廢止が原

を肯んせざる政府が自ら外米の買付をなさんとするが如き是れ亦一つの矛盾と目さざるを得ないのである。且つ外米の買付が供給の増加となりて米價調節に效果あることは關稅の撤廢と共に明瞭な事實であるけれども而も外米の買付には經費、財政上の負擔、政治上の責任等之が實行に困難なる種々の事情の隨伴するものがある。然るに何んを苦んでか、彼の最も有效なる可き關稅の減廢を措いて此による可き必要があらうか若し政黨の反對を恐れて自己の抱負を實行する能はずんば潔く其地位を去ることを責任ある政治家の採る可き道ではないか。

官儉式調節策

以是觀是政府の從來採り來りたる調節策の多くは何等米價騰貴の根本的原因に觸るるものではない。其爲す所は或は暴利取締令及び定期取引の制限等により只徒らに官權を振り翳して經濟

界に臨むか、然らずんば退いてお爲めごかしの訓令、諭達によりて賣放ひを懲罰する等其國民の經濟生活に對する猶恰かも檢事が犯罪人を或は脅威し或は賺かして其罪狀を自白せしめんとするの概があるのである。是れ吾人が敢て官僚式調節策と云ふ所以である。而して我仲小路農相に此の事ある敢て怪しむを用ひないけれども、而も屬僚中一人の立つて氏を補導するの知あるものなきは如何。知りて之をなす能はざるは勇なさと云はん。若し眞に米價調節の必要ありとなさば吾人は速かに我當局の調節策が其正道に就かんことを希望して已まないものである。

批評と紹介

福田德三著『經濟學考證』

大正七年三月東京佐藤出版部發行
菊判七一〇頁 定價金參圓八拾錢

本書は福田博士が主として最近數ヶ年間に於て學術雜誌に發表せられたる經濟學說に關する博士一流の考證嚴密引照該博なる數篇の論文を收載せるものであつて、其内容は第一篇シーザー及タチトスに據る古獨逸土地共有制度、第二篇穂積博士の隱居論を讀む、第三篇勞働權、勞働全收權及勞働協約、第四篇生存權の社會政策、第五篇英佛兩國大小農制に關するアーサー・ヤングの研究、第六篇マルサス人口論出版當時の反對論者特に生存權論者、第八篇英國の學問としての經濟學殊に商國主義の始終、第九篇現代

の商業及商人に分たれてゐる。此中第一篇は曾て『和田垣教授在職二十五年紀念經濟論叢』に收録せられたる論文であつてシーザーが其『ガリア戰記』De Bello Gallico に於て並にタチトスが其『ゲルマニア志』Germania に於て各々古代獨逸の土地制度に就きて費したる數言の意義に關する學者の所論を紹介すると同時に著者自身の持論を載せたものである。第二篇は曩に福田博士が『三田學會雜誌』の紙上に公にせられた論文であつて、穂積博士著『隱居論』第二版に對する批評文である。然し、決して尋常一様の批評文ではなく、穂積博士の所論を解剖批判し、立論考證上の缺陷を指摘するは勿論、進んで隱居制度に關する福田博士自身の研究及び見解を發表せる約百頁に亘る堂々たる一大論文である。第三篇以下第八篇迄は『三田學會雜誌』『經濟論叢』及び『金井教授在職二十五年紀念最近社會

政策』等に掲載せられたる論文に多少の補筆を加へて再録せられたものであるが、此六篇は量に於ても學術的價値に於ても正に本書の主要部を構成すると看做して差支へあるまい。何れも經濟學史上の特種問題に對する博士の綿密精緻なる研鑽の成果であつて、殊に文獻的考證に意を用ひられたものである。最後の第九篇現代の商業及商人は大正五年三月より大正六年三月迄『商店雜誌』に連載せられたる商業に對する博士一流の側面觀を通俗的に記述せられたもので、内容の性質に於ても又其叙述の體裁に於ても他の論文とは大に其趣きを異にしてゐるが、一般讀者は勿論専門の研究者をも興味を以て最後の頁迄讀ましむるの筆致に於ては本書に收められたる他の孰れの論文にも必ずしも劣るものではない。